



国際的な取り組みを行うタイ王国の看護教育についてのフィールドスタディ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 勝山, 愛, 長野, 弥生, 赤崎, 芙美, 松本, 赳史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005673

資 料

国際的な取り組みを行うタイ王国の看護教育についての フィールドスタディ

Field Study on Globalization of Nursing Education in Thailand

勝山愛¹⁾・長野弥生¹⁾・赤崎美美²⁾・松本赳史²⁾

Ai Katsuyama, Yayoi Nagano, Fumi Akasaki, Takeshi Matsumoto

キーワード：看護教育学，フィールドスタディ，タイ王国
Keywords: nursing education, field study, Kingdom of Thailand

I. はじめに

日本の外国人登録者数や訪日外客数は平成28年度に過去最高となっており（法務省，2017；日本政府観光局，2017），日本において外国人に対して医療を提供する機会が増えている。国内医療機関による外国人患者受入は，国内での発症数が少ない症例の増加に伴う医療技術の向上や高度な医療技術の提供に対して保険診療以外での収入の獲得につながるため，結果として，医療機関では施設設備やサービスのさらなる充実が図られ，国内の患者に提供される医療サービスの質の向上にも寄与するとされている（経済産業省，2016）。そのため我が国では，医療の国際化に向けた積極的な取り組みを推進しており，外国人患者へ医療を提供することは，今後より身近なものになっていく。看護学分野においても，平成20年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正により，国際看護のカリキュラムが看護の統合と実践の一つに位置付けられ（厚生労働省，2007），医療の国際展開に対応できるような国際性豊かな看護師が求められている。

筆者らは，大学の国際交流支援を受け，タイ王国（以下，タイとする）のタイ王立マヒドン大学ラマティボディ校医学部看護学科（Ramathibodi

School of Nursing, Faculty of Medicine Ramathibodi Hospital, Mahidol University；以下マヒドン大学ラマティボディ校とする）の視察と国際看護研究学会（International Nursing Research Conference；以下INRCとする）へ参加の機会を得た。タイは，周辺国から多くの外国人が滞在する東南アジア諸国連合（Association of South-East Asian Nations；以下，ASEANとする）主要国であり，医療・看護の国際化が進んでいる。そこで，大学視察や国際学会参加からタイの国際性を育む看護教育に焦点を当てて概説し，我が国における国際性豊かな看護系人材の育成に向けた看護教育について検討する。これらは，日本において国際性豊かな看護系人材を育成するための参考資料になる。

II. タイにおける看護の概説

1. 看護の歴史と王室

タイにおける最初の看護師規則は，Sauwapa Pongsri女王の要請のもと1896年に定められ，同年，最初の看護学校（現在のマヒドン大学看護学部）が創設された。その後，ラマ6世在位中の1923年に医療従事者の職務・資格などを規定する医療免許法（Medical license act），1936年に

受付日：2018年9月26日 受理日：2018年12月26日

1) 大阪府立大学大学院看護学研究科 博士後期課程

2) 大阪府立大学大学院看護学研究科 博士前期課程

ラマ8世の命を受けて医療法 (Healing art act) が、それぞれ制定された。1968年には医療評議会が創立し、1985年に看護師助産師法 (Professional Nursing and Midwifery Act) が制定され、看護師助産師評議会 (Thailand Nursing and Midwifery Council; 以下、TNMCとする) が創立された (兵頭, 2009)。このようにタイでは、医学や看護学の発展に王室の人々が大きく寄与しており、1978年以降から全ての看護基礎教育課程が大学になるなど、早くから看護教育の質の向上を図ってきた。今回視察したマヒドン大学は、「タイの現代医学と公衆衛生の父」と呼ばれている Mahidol 親王が名称の由来となっている。また、その王妃である Sinagarindra 王太后は「タイ看護界の母」として敬われている。両人とも米国の大学で得た知見をもとにタイの医療の発展に尽力しており、タイには国際社会から学び、還元していくという考え方が根付いている。

2. TNMCと看護師免許

看護系大学の設置や看護師養成教育のカリキュラム、看護師助産師の免許取得や更新制度は TNMC のガイドラインに基づいており、TNMC から認可された看護系大学を卒業することが国家試験の受験資格となるなど、TNMC は看護の質の保証に責任を持っている (東田ら, 2015)。

国家試験は、年に3回実施され、TNMC の認可を受けている86施設 (2017年現在) から毎年1万人以上の看護師が誕生している。タイでは全ての学生が看護師と保健師、助産師の内容を学び、資格は看護師に一本化されている。そのため、受験科目は (1) 成人看護学 (2) 老年看護学 (3) 小児看護学 (4) 精神看護学 (5) 地域看護学 (6) 母性看護学 (7) 法律と倫理 (8) 助産学の8科目となっている。科目ごとに合否の判定があるため、3年間是不合格の科目のみ再テストが可能である。2002年からは、看護の質の保証のため免許更新制度を導入しており、5年に1回の更新が必要とされる。

Ⅲ. タイにおける国際性を育てるための教育の実際

1. 視察大学の紹介

マヒドン大学ラマティボディ校は、マヒドン大学医学部のラマティボディ病院の1部門として、米国にあるロックフェラー財団の支援によって1965年7月27日に創立された (図1)。教育、研

究、サービスを通して、人びとの健康の発展のために貢献している。国際レベルで看護系大学を先導する存在となることを理念としており、タイ語プログラムとインターナショナルプログラムの2つのプログラムがある。タイ語プログラムには、学士課程、修士課程、専門看護師養成課程があり、インターナショナルプログラムには、修士課程、博士課程がある (図2)。各課程の学生数は、学士課程の学生数は250名/学年であり、修士課程の学生は計70名/学年 (内タイ語プログラムの学生数60名/学年、インターナショナルプログラムの学生数10名/学年)、博士課程の学生数は15-20名/学年である。マヒドン大学ラマティボディ校には、メインキャンパスのパヤータイキャンパス (写真1) とサラヤキャンパスがある。主に学士課程の1・2年生は、サラヤキャンパスを使用し、学士課程の3・4年生と修士課程および博士課程の学生は、パヤータイキャンパスを使用しており、隣接するラマティボディ病院で臨地実習を行っている。

修士課程の入学要件は、看護学学士が必要であることであること、学士課程卒業後に臨床経験が1年以上あること、TOEFL[®] で500点以上 (TOEFL iBT[®] 61点以上) または IELTS[™] 6点以上であることであり、臨床経験や総合的な高い英語力が求められていることが特徴である。

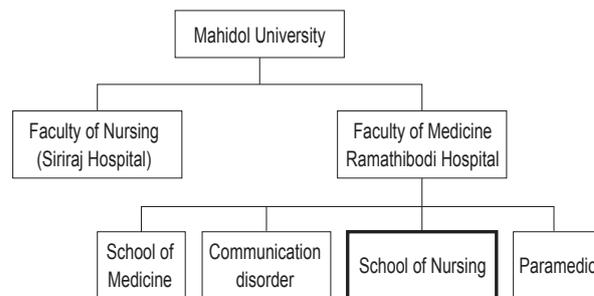


図1 ラマティボディ校の組織図

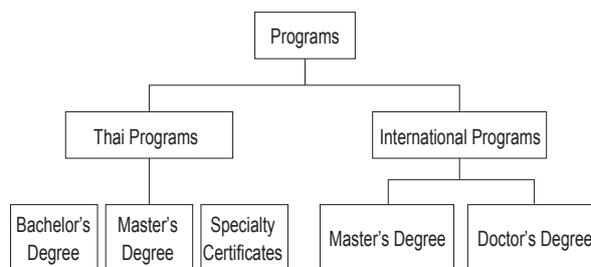


図2 ラマティボディ校のプログラム



写真1 ラマティボディ校バヤータイキャンパス

2. シミュレーション教育

シミュレーション教育は、学士課程の2年次から開始され、成人看護学領域だけでなく、小児看護学領域や母性看護学領域等、各領域の授業の中で実施されており、それぞれブースが設けられていた(写真2)。学生は、シミュレーションのシナリオに基づいて看護を実践し、教員はコントロール室にて、学生の様子を観察し、必要に応じて患者の状態を変化させる。シミュレーション後は、見学していた学生を含め、教員とデブリーフィングを行う。学生は臨地実習が始まる前にシミュレーション施設を活用し、臨地実習に備える。学生が臨地実習を行うラマティボディ病院には、ASEAN諸国の患者が多数入院しており、外国人を対象に看護実践をしている場面を見る機会が多くある。マヒドン大学ラマティボディ校には、学士課程の授業科目の一つに「グローバル・ヘル



写真2 シミュレーション教育の風景

ス」という英語で行われる授業科目があるが、シミュレーション教育もタイ語と英語の両方で行われており、外国人患者への対応を視野に入れたカリキュラムとなっている。また、国際交流の際にシミュレーション教育の紹介がされ、海外の学生と患者対応について意見交換する機会が多く、学生の異文化理解につながっている。

3. 国際交流

マヒドン大学ラマティボディ校は、修士、博士課程にインターナショナルプログラムがあるように、国際交流が非常に盛んである。学生たちは、日本、カナダ、デンマーク、スウェーデン、台湾および近隣諸国の大学との交換留学に積極的に参加し、海外から多くの知識、技術の学びを得ている。交換留学の学生数は、学士課程で40名/年、修士課程で3名/年の実績がある。本校では、マヒドン大学ラマティボディ校と提携し、2～4名の大学院生が毎年2週間交換留学をしている。彼らはお互いの国を行き来し、大学院生同士で交流を深めることで、外国の医療および看護に加え、歴史や文化についても学んでいる。

IV. 研究発表にみる国際性を育てる教育

今回参加したINRCは、TNMCと世界看護科学学会(World Academy of Nursing Science; 以下WANSとする)が世界の健康成果を改善するための看護研究ネットワークを提供するために、「国際保健のための文化、共創、協力」をテーマに合同で開催した国際学会である。研究発表されていた中から、Humanized CareとTranscultural Nursingという2つの概念について説明する。どちらの概念も、文化的側面を重要視しており、国際性豊かな看護師の育成を検討する場合、文化の違いに注目する視点を育むことが鍵になるといえる。

1. Humanized Care

Humanized Careは対象を全人的に捉えたケアを表した概念である。自己変容につながる患者へのケアやコミュニケーションのプロセスを伴うもの(Umenai et al., 2001)と言われており、患者へのケアやコミュニケーションを通して全人的に患者を捉える看護実践へと変容していく過程も含んでいる。

タイのBCNR(Boromarajonani College of Nursing, Ratchaburi)では、Humanized learning

をカリキュラムに取り入れており、インタビューからこのカリキュラムによる学生の変容と、変容に影響を与えた教員の関わりを明らかにすることを目的に研究が行われていた (Jiriya et al., 2017). 学生は、文脈の中で患者を理解したうえで個人のニーズや問題に対応したケアを提供していた。教員は学生に対し、自分の知識や感情に向き合えるような質問をしており、この関わりが学生の患者理解を促していた。Plerntaら (2018) は、学生が患者理解のために、コミュニケーションを通してニーズの把握に努め、患者の生活状況や仕事、社会的背景など社会的側面にも目を向けていたことや、これらの過程で得た情報と培った知識を患者の現状と照らし合わせながら患者に具体的な解決策を提案するなど、適切なケアを提供していたことなどから、Humanizedという概念には、患者の健康とニーズの理解、社会と結びつけた健康問題の理解、知識の実践での活用の3つの要素があることを明らかにしている。

また、タイで出会った看護師は、自分たちの宗教やそれに伴う生活習慣の特徴について自ら詳細に語り、外国人患者を全人的に捉えるためには文化を知ることが重要であることを教えてくれた。タイで外国人患者を積極的に受け入れている病院では、外国人患者との文化的困難を経験していることが明らかにされており (望月ら, 2016), 全人的に患者を捉えるHumanized Careを実践できる看護師の育成においても外国人患者への対応を想定し、文化的な側面を重要視している。

2. Transcultural Nursing

Transcultural Nursingとは、Leiningerが文化的背景を踏まえた対象理解や看護の重要性について提唱した概念である。Leininger (1992/1995) は、国境を問わず世界のあらゆる文化にまたがってという意味で、国際的 (international) ではなく、文化を超えた (transcultural) という言葉を意識的に使っており、日本では「異文化看護」と和訳を付し使用されている (日本看護科学学会, 2017; 大野, 2007; 辻村ら, 2014)。

バンコク・パタヤ病院は、看護師を対象に異文化間能力向上プログラム (Transcultural Nursing Competency Promoting Program; 以下TNCPP) を実施しており、プログラムに参加した看護師と参加していない看護師の異文化間能力を比較し、TNCPPの有効性を検討することを目的に研究が行われていた (Rujita et al., 2017). TNCPPは、Camoinha-Bacote (2002) の概念モデル “The Cultural Competent Model of Care” を参考に3段

階で構成されていた。第1段階では、異文化看護の講義を受け、基礎知識を獲得する。講義内容は、異文化看護の概念と実践への適用、コンピテンシー、コミュニケーション、コンサルテーション、倫理や法律などである。第2段階では、文化への意識を高めるために関連病院と合同でグループワークでの事例検討や外国人患者へのガイドブックを作成するという課題に取り組む。第3段階は、技能の獲得や異文化間能力を高めたいという意欲を高めるため、現場での実践を通して自己課題を明らかにすることである。看護師の異文化間能力は、Camoinha-Bacote (2002) の概念モデル “The Cultural Competent Model of Care” を参考に作成された質問紙にて3段階で測定されていた。測定項目は、文化に対する認識、知識、技能、意欲、欲求である。自己評価、管理者評価、同僚評価の全てにおいて、プログラムに参加した看護師のプログラム後の得点が有意に上昇しており、TNCPPの有用性を明らかにしている。

この研究報告から改めて異文化間能力について調べると、異文化間能力は、Cultural CompetenceとしてLeiningerが提唱した概念であり、「クライアントの持つ文化に敏感で、合致したケアを提供する能力」であると定義されている (Leininger, 1999) ことがわかった。Camoinha-Bacote (2002) は、異文化間能力は、多くの文化的な出会いを求めて経験することから始まり、連続的な文化的遭遇を通じてのみ文化的知覚、文化的知識、文化的技能、文化的欲求を獲得できると述べている。これらを踏まえてTNCPPを見ると、プログラムの7割が実践を通じた学習で構成されており、異文化に触れる経験に重点を置いたことがプログラムの有用性につながっていたと考える。

V. 日本における国際性豊かな看護人材の育成のための課題

1. 国際交流

マヒドン大学ラマティボディ校の学生は、半数以上の学生が留学を経験しており、学生の国際交流への関心が高いことを感じた。日本においても平成23年度大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会最終報告に「長い職業生活においてあらゆる場、あらゆる利用者のニーズに対応できる応用力のある国際性豊かな看護系人材の育成を目指す」と明記され、教育機関において看護師の国際的な視野の育成に向けた取り組みが行われている。本学は国際性を重んじた基本理念を持つ総合大学であり、様々な留学プログラムや奨励金制度など、国際交流の支

援体制が整っている。しかし留学を経験している学生は少数であり、今後学生の関心を高め、国際的な視点を持った看護師の育成につなげていく必要がある。

学生の関心を高めるためには、先進国の看護からこれからの医療を考える上での知見を得ることや、発展途上国の看護から環境整備の重要性に改めて気づく機会とするなど、世界の看護を知るとは自分の看護観、看護実践を豊かなものにするということを実感してもらうことが必要である。

そして、国際交流を活発にしていく上で語学力の向上も重要である。マヒドン大学ラマティボディ校では、学士課程から一部の授業が英語で実施されていることもあり、多くの学生は英語が堪能である。また修士の学生は「英語ができないことで、自分の研究を世界へ発信できないなんてもったいない」と語っており、海外への関心の高さが語学力の向上につながっていた。これらを参考に、日本においては、海外から招聘された講師が行う講演会に参加すること、英語で授業や研究のプレゼンテーションを行うこと、英語の教科書を使用することなど、英語を使って学ぶ機会を増やしていくことが有用であると考えられる。また海外留学や研修に参加した学生は、そこでの学びを発信していくことも大事な役割である。修士・博士課程の学生は、国際性豊かな看護師のモデルとなれるよう海外留学や研修の参加に加え、国際学会での発表、海外への論文投稿などに取り組んでいく必要がある。

2. 異文化への理解

外国人患者の対応には文化的困難が伴うため、タイでは、異文化看護に力を注いでいた。Humanized Careは、患者を包括的に捉え、ニーズを満たすために看護師にできることは何かを患者とともに考え、支援できる能力が重要視されており、その際に、文化的側面に注目し、患者理解に努めていた。患者を全人的に捉えるということは日本の看護においても同じだが、相手の文化的側面に注目していくことが国際性豊かな看護師を育成するために必要になってくるため、看護の国際化が進むことで課題になるのが異文化への理解であることを再認識することができた。

文化的な側面を踏まえて看護実践ができる異文化間能力を育むためには、異文化看護における知識や技能、態度に加え、異文化背景を持つ患者の看護に携わる意欲が必要とされている(Camoinha-Bacote, 2002)。筆者らは、タイで宗

教的な食事制限があることや外食が多いという文化に触れた。それらの経験は、外国人患者の対応をする際には、宗教について把握し、禁止食材や食習慣を踏まえて退院指導を工夫する必要があるなど、文化に配慮したケアを具体的に考える機会となった。そのため、海外旅行や国内での異文化交流という異文化に触れるどんな経験においても文化を尊重した看護実践につなげるという視点を持つことで、異文化間能力の高まりにつながると考える。

また、海外に渡航しなくても、マヒドン大学ラマティボディ校においても行われていたシミュレーション教育において外国人患者を設定することが有用な方法の一つとしてあげられる。シミュレーション教育では、臨床で起こりうるシチュエーションで知識を最大限用いて実践し、教員がファシリテーターとなりデブリーフィングすることで学習効果があるとされており、文化的側面について学生とやりとりすることで、異文化への関心や理解が深まる効果が期待できる。

さらに、Leininger (1992/1995) は文化を「集団が習得し、共有し、伝達してきた価値観・信念・規範・生活様式、これを指針としてこの集団の思考・意思決定・行動などが一定のパターンに沿って行われる」と定義している。つまり、同じ国籍でも生まれ育った環境によって、文化は違い、持っている価値観は多様であるといえる。そのため、異文化看護は外国人と関わる時だけでなく、日々の看護に適應されるべき考え方である。看護師の文化への関心を高めるために臨床現場において、院内研修や病棟カンファレンスなど、看護のあらゆる場面で患者の文化的背景について検討を重ねていくことが求められる。

謝 辞

今回、視察・交流に際しご配慮いただいたマヒドン大学ラマティボディ校関係者の皆様、研修の機会を与えて下さった大阪府立大学大学院看護学研究科グローバル推進部会関係者の皆様に深く感謝致します。

参考文献

- Camoinha-Bacote, J. (2002) : The Process of Cultural Competence in the Delivery of Healthcare Services: A Model of Care. *Journal of Transcultural Nursing*, 13(3), 181-184.
 法務省 (2017) : 平成28年末現在における在留外国人

- 数について, 2018/07/16, http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00065.Html
- 兵頭慶子 (2009) : タイにおける看護教育事情—プリンス・オブ・ソンクラ大学看護学部を訪問して—. 南九州看護研究雑誌, 17(1), 31-35.
- Jiriya, I., Yaowaluck, M., Rungtip, C., et al. (2017) : Teaching Using Humanized Care Concept at BCNR, Thailand. International Nursing Research Conference 2017, Bngkok, 20-22 October 2017.
- 経済産業省 (2016) : 病院のための外国人患者の受入参考書, 2018/07/16, http://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/healthcare/iryoku/downloadfiles/pdf/26fy_sankousyo_all.pdf
- 厚生労働省 (2007) : 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書, 2018/07/16, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>
- Leininger, M. (1992) : Culture care diversity & universality a theory of nursing. National league for nursing press. / 稲岡文昭 (1995) : レイニンガー看護論文化ケアの多様性と普遍性. 医学書院, 東京.
- Leininger, M. (1999) : What is Transcultural Nursing and Culturally Competent Care?. Journal of Transcultural Nursing, 10(1), 9.
- 望月由紀, 野地有子, パクピライ・スリランク, 長谷川みゆき (2016) : タイ王国東北部地域の病院看護部から見た病院と看護の国際化対応の現状~3病院への聞き取りから~. 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 38, 69-74.
- 日本政府観光局 (2017) : 訪日外客数, 2018/07/16, https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/pdf/170117_monthly.pdf
- 日本看護科学学会 (2017) : 異文化看護データベース, 2018/07/16, <http://jans.umin.ac.jp/iinkai/intl/index02.html>
- 大野夏代 (2007) : 米国のテキストにおける「異文化看護」の記述内容の検討. SCU Journal of Design & Nursing, 1(1), 15-21.
- Plernta, Prombuasri., Jiriya, I., Kunlaya, S. et al. (2018) : The use of Humanized Care Concept in Nursing Education: Teaching in Practicum of Primary Medical Care course. 2018/07/16, http://www.grad.mahidol.ac.th/storage/Internet/grad_conference/paper/2556/1/5610158/F-5610158.docx
- Rujita, K., Paradee, A., Ketsara, P., et al. (2017) : Effectiveness of Transcultural Nursing Competency Promoting Program for Professional Nurses of Bangkok Pattaya Hospital. International Nursing Research Conference 2017, Bngkok, 20-22 October 2017.
- 東田吉子, 中田覚子, 竹尾恵子 (2015) : タイ国, プラパ大学における国際看護論の実施と学習の成果. 佐久大学看護研究雑誌, 7(1), 65-74.
- 辻村真由子, 野地有子 (2014) : 平成24年度留学生交流支援制度 (ショートステイ・ショートビジット; SSSV) による異文化看護 (Transcultural Nursing) プログラムの取り組み ソウル国立大学看護学部へのショートビジット. 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 36, 39-45.
- Umenai, T., Wagner, M., Page, L. A. et al. (2001) : Conference agreement on the definition of humanization and humanized care. International Journal of Gynecology & Obstetrics, 75, 3-4.